
ショートショート パート1

春野天使

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ショートショート パート1

【コード】

N5919B

【作者名】

春野天使

【あらすじ】

交流サイトの掲示板の「即興小説」から、自分の作品だけを投稿してみました。千文字以内のショートショートストーリーです。

一、ダブルの幸せ 「合格」「紙幣」「自転車」(前書き)

三つのお題は、前に執筆した方が考えます。お題を考えていただいた方々、ありがとうございます！そして、楽しい企画を考えてくださった物書き魂さん、どうもありがとうございます。

「一、ダブルの幸せ」「合格」「紙幣」「自転車」

「あつた〜!」

僕は思わずその場でジャンプする。東の空が白み始めてきた。吐く息も真つ白で凍えるように寒い。けれど、僕は嬉しさで寒さなんか感じない!

この喜びは、志望校に合格した時と同じくらい、いやそれ以上に大きかった。

僕は懐中電灯を消し、ピンセットで小さな紙切れをつまむと、ビール袋の中に入れた。

「これで全部拾ったぞ」

僕は大満足で、袋の中の紙切れを見つめる。小さな紙切れ……それは、大切な一万円札の最後の一切れだ。家に帰れば、ここ数日拾い集めた紙幣の紙切れがある。最後の一切れだけ、なかなか見つからなかった。紙幣の三分の二が残っていれば、新しいお札と交換出来るけど、僕は最後のひとかけらまで見つけたかった。

疲れた。もうこりこりだ。あんな宣言するんじゃない。僕は、フーと大きく息を吐いて自転車に乗る。

『もし、高校に合格したら、皆の前で一万円を紙吹雪にしてばらまいてやる!』

僕はクラスメイトの前で、大宣言してしまったのだった……。まさか、あの名門校に合格出来るとは考えてなかった。

「ま、いいか。志望校に合格出来て、一万円も元に戻ったんだし!」僕は声を立てて笑うと、朝日が差し始める中、勢いよく自転車を漕ぎ出した。

ショートショート パート1

一、ダブルの幸せ 「合格」「紙幣」「自転車」 (後書き)

初めて「即興小説」に参加して書いた作品です。短くまとめるのが難しいですね。でも、三つのお題があると、発想が広がります。けど、せこい男の子です。でも、15の子にとって一万円は大金です。私にとっても大金です。^^;

二、初恋の彼 「自転車」「銅像」「マフラー」

あなたはいつものようにクールな眼差しで、じっと本に目を落として
いる。雪が降ってきそうなくらい寒いのに、いつもと同じように
薄着ね……。

真面目で無口なあなた。でも、あなたはいつも私の側にいてくれ
て、私を置いてどこにも行かない。

私が振られた時も、ずっと側にいてくれた。泣きながらふられた
彼のことを未練がましく話しても、嫌な顔もせずじっと私の話を聞
いてくれた。

……本当に聞いてくれたのかな？ あの時もあなたはズーと本を
読んでいたから、聞いてくれたかどうかは分からない。本当にあな
たは本ばかり読む勉強好きなんだから。

でも、良い。毎日、自転車で会いに来るね。これ、あなたにプレ
ゼントする。彼のために編んだんだけど、あなたにあげる。今度は、
あなたのために編んであげるね。

私は自転車の籠から手編みのマフラーを取りだして、彼に巻いて
あげた。

彼は出身小学校に建っている「二宮金次郎」の銅像……。二宮金
次郎がある学校って少なくなっただけ、ここにはまだあるものね。

銅像の彼は私の初恋の相手。ずっと、ずっとここにいて、どこに
も行かないでね。

あとがき

六百文字以内の投稿が出来ないため、後書きをここに書かせていただきます。

「銅像」と言えば、あの偉大なる八十肇さんの銅像姿を思い浮かべてしまいますが（^^）、これは二宮金次郎さんの銅像です。着物姿で薪を背負い、熱心に本を読んでいる姿は有名です。最近、すっかり姿を見かけなくなりましたが、つい最近ある小学校で彼の姿を発見しました！ かなりちっちゃいタイプで、マフラーをかけたらほとんど身体が隠れてしまいそうでしたが。^^；

三、オムライスに込めた願い 「恥」「オムライス」「お日様」

「もー！ ダメでしょ、マー君！」

出張先の小さな食堂で、若いママが小さな男の子を叱っている。

「ケチャップでお絵かきしちゃダメっていつも言ってるでしょ」

男の子の前のテーブルには、オムライスが一つ。男の子はちっちゃな手でケチャップの容器を握ってる。

「やだ！ ボク、いつもオムライスにはお日様の絵を描くんだもん」

男の子のオムライスは、ケチャップで描いたお日様で真っ赤だ。

俺はちよつと恥ずかしい気持ちになりながらも、自分のテーブルの上のオムライスを見つめる。

三十過ぎてオムライスを注文するのもなんだが、俺は出張先では必ずオムライスを食べている。で、あの男の子と同じようにケチャップでお日様の絵を……。

苦笑いしながらも、俺はお日様の部分をスプーンですくって口に含む。うまい！ お日様のオムライスを食べると仕事も上手くいく。恥ずかしくて妻には言えない、俺のげんかつぎだ。

あとがき

次回から六百文字以上千文字以内を目指します……。

そう言えば、昨日の夕飯は「オムライス」でした。最近のオムライスは、ライスを卵で巻くんじゃなくて、卵を上に乗せるだけっていうのが多いです。自分で作る時はその方が簡単ですね。でも、昨日はくるりと卵でくるんだオムライスを作ってみました！ なか

なか巻くのは難しいですよ。ライスを少な目にと良いですね。なんとか、綺麗に作れました。

ケチャップのお絵かきはしません。面倒です。

この作品はなんとなく思いつきました。レストランだと、ケチャップでお絵かきは出来ないと思うんで、小さな大衆食堂のイメージです。

四、優しい兄 「風邪」「鮭」「学校」

「ハックション！」

学校を出たとたん、私は大きくしゃみをした。見上げた空は冬模様。チラチラと粉雪が舞っていた。

私は足取りを速めて、家へと急ぐ。もうすぐ高校入試なのに、風邪なんてひいてられない！

「おかえりー」

家に帰ると大学生の兄がいた。学校はもう冬休み。家でゴロゴロしてるばかりだから、たまに鬱陶しく思う。

「ハックション！」

兄の目の前で、また、大きなくしゃみをした。

「あつ、お前風邪ひいたんじゃないかねえか？」

「そう言いながら、兄は台所へ行く。」

「来いよ。今から兄ちゃんがいいもん食わしてやる」

「いいもん？……」

私は胡散臭く思いながらも、風邪でだるくて言い返すのも面倒。素直に兄について行く。

「ジャーン！ どうぞ！」

私の目の前には、ドンブリに入った鮭茶漬けが置かれた。鮭フレークがたっぷりのお茶漬けは、兄の好物だ。

「これで風邪治るぞ」

「……？ 鮭茶漬けで風邪が治るなんて聞いたことないよ」

「治るつて。これ、兄ちゃんの愛情たっぷり茶漬けだから」

私は軽いため息をつきながら、兄の鮭茶漬けを食べてみる。割と美味しい。一緒にのったたくわんのお漬け物も良い感じ。

「兄ちゃんも鮭茶漬けで風邪治った」

私は温かいお茶漬けをサラサラと食べる。結構優しいところもあるじゃん。

「風邪って人にうつすと治るとも言うよな」

私はドンブリを置いて、パジャマ姿の兄を見る。兄は屈託のない顔をして、笑ってた。

「……」

兄の風邪は完全に治ったみたいだ。

四、優しい兄 「風邪」「鮭」「学校」(後書き)

ジャスト六百文字です!(^^)

ちよつとだらしない兄としっかり者の妹という感じですが。風邪は治りかけたときに、人にうつすようですね。要注意です。

五、不幸な女 「電柱」「白桃」「眼鏡」

あたしは度のきつい眼鏡をかけると、自転車に飛び乗った。目指すはスーパー！ いざ、出陣！

猛スピードで自転車を漕ぐ。

何故って、あの高級白桃の缶詰が一個五十円なんだから！ 白桃って缶詰の中でも高い。安売りなんて滅多にしないの。

それにそれに、あたしは白桃が大好き！

開店前のスーパーに列を作って並び、開店と同時に押し寄せるおばさん連中のパワーにもひるまず、なんとか白桃の缶詰を三個ゲットした！ もっと欲しかったんだけど、お一人様三個限りだったの……。

嬉しさで舞い上がりながら家路へ急ぐ。ペダルを踏む足に力が入る！ ぐんぐんスピードが出る。ちよつと力が入りすぎてしまったみたい……。急に路地から飛び出して来た子猫に、気付くのが遅れてしまった。あたしは避けようと、必死でハンドルを切る。

キキキイーツ！ ガツシャーン！

凄まじい勢いで、あたしは電柱に激突した。怪我をしなかったのが奇跡みたい。けど……自転車のハンドルは曲がり、あたしの眼鏡は無惨にも砕けた……。

あたしは泣きそうになりながら、曲がった自転車を押し、ぼやけた視界でどうにか家に辿り着いた。でも、あたしには白桃の缶詰があるから！ 白桃を食べられたら幸せよ。

しかし……その幸せは無惨にもうち砕かれました。あたしは当分白桃の缶詰を食べることが出来ない。その缶詰はパツカンじゃなかった。あたしの家には缶切りがない。

眼鏡も自転車も使い物にならないし……あたしは絶句し、声をあ

ショートショート パート1

げて泣きじゃくった。

五、不幸な女 「電柱」「白桃」「眼鏡」(後書き)

六百文字にちょっと足りなかったので、少し書き直して長くしました。 ^ ^ ;

彼女は悲惨な目にありましたね…「うつうつ目にはあいたくないです。

六、やきもち 「広辞苑」「ドア」「猫」

あー、いたいた。また夢中になって広辞苑を読んてる。

わたしはドアの隙間に手をかけて、そーと彼の部屋に入っていく。仕事熱心なのはいいけど、熱中しちゃうといつもわたしのこと忘れちゃうんだから。

彼は作家。今もパソコンの前に座り、必死で広辞苑をめくっている。ネット検索すればいいのに、やっぱり広辞苑がいいんだって。

わたしは甘えた声を出して、彼の膝に手を伸ばす。

「あ、ミーク……やばい、朝ご飯まだだったな。昨日は徹夜で書いてたからさ……」

彼は眠そうに欠伸する。新米作家さんは色々大変でしょうけど、わたしのご飯は忘れないでね。

「ミャー！」

黒猫のわたしは、ちょっと膨れて彼の広辞苑の上に飛び乗る。ご飯をくれるまで、見せてあげない！

あとがき

これは一番短い、たった三百九文字の作品でした……。後書きで字数を増やします。

交流掲示板では、タイトルはつけてませんので、今回一話一話タイトルをつけてみました。後でタイトルをつけるっていうのも楽しいですね。掲示板に書き込む時は、だいたいのあらすじを頭の中でイメージし、直接書き込んでいます。まさに、即興ですね。書いた後、読み直したりはしますが、ほとんど思いつきで書いてます。

三つのお題から色んなイメージが膨らんで楽しいです。このストーリーは、なんとなく猫がドアに手をかけて部屋に入ってくるシーンが頭に浮かんできました。猫は器用なんで、大抵のドアは開けますよね。足音もなく忍び寄ってくるという感じですよ。

六、やきもち 「広辞苑」「ドア」「猫」(後書き)

ショートショートパート1最後の作品です。パート1ということでも、またパート2も書いてみようと思っております。(^^)
読んで下さってありがとうございます！

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5919b/>

ショートショート パート1

2008年11月7日08時24分発行